
君に贈るクリスマス 沖/神

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に贈るクリスマス 沖ノ神

【Nコード】

N3127F

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

12月24日クリスマス。沖田と神楽の二人にとって、初めてのクリスマス。神秘の夜に、二人の愛はより一層深まる。

（前書き）

まだクリスマスシーズンには程遠いですが、これを、クリスマスのイメージを頭に思い浮かべて読んでもらえたら良いと思います。

11月1日 午前10時50分 本文大幅改正。

ご迷惑おかけします。 クロフォード

クリスマス・イヴの朝。

万事屋では、神楽が出かける準備をしていた。

いつも通り、チャイナ服に身を包み、頭に団子を作り、丸い髪留めで留める。

いつかもらった、沖田の赤いマフラーを持って。

当然今日は、イヴなので神楽は沖田に会いに行くのだった。

「じゃ 銀ちゃんそろそろ出かけるアル！」

「おう 気をつけてな」

「メリークリスマス！」

「いや イヴだから」

などと、また朝から拍子抜けな会話が行われているのであった。

神楽が、ガララと、玄関の戸を開けると、新八がいた。

「あ 神楽ちゃん おはよう 何？どっか出かけるの？」

新八の問に、神楽は笑顔で返す。

「うん じゃ 浮かない顔した男どもは家でシコシコやってるとい
いネ！」

「うん 神楽ちゃんは女の子なんだからそういうこと言わないの」

「うん じゃ メリークリスマス！」

「いや イヴだから」

神楽は走っていった。

「銀さん…今日の神楽ちゃん やけにテンション高いんですけど…
…」

新八の間に、銀時は気だるそうに答える。

「あー？ お前今日は何の日か知らねーのか」

「え？クリスマス・イヴでしょ？」

当然の様な返答に、銀時は返す。

「そつだよ」

「……………え？だから？」

戸惑う新八に銀時は適当に答える。

「お前は知らなくて いーんじゃね？少なくとも お前以外のみんな知ってるよ」

そう、新八だけは神楽と沖田の関係をまだ知らないのだった。

神楽は、真選組の門の前にいた。

すると、土方と十番隊隊長、はらだ原田 うのすけ右之助が出てきた。

「あ？お前 万事屋のこのチャイナ娘じゃねーか どうした……
って総悟か」

「サドいるアルか？」

「いや 今はいねーな 今朝早くどっか行っち待ったよ」

それを聞いた神楽は、少し……というか、かなりショックを受ける。

土方はフオローしようとしたのか、続ける。

「まあ オレたち真選組は年中仕事だからな 今日諦めたらどうだ？アイ

ツも仕事もないのに お前を放っておいて自分だけ休むヤツじゃないだろ」

「うん……でもマヨたちは どこに行くアルか？仕事アルか？」

「あ？いや 俺たちは 今日は久しぶりの休みなんだな あれだ【エイリアンVSヤクザ】After story」見に行くんだよ なア 原田」

「じゃあ帰るアル」

神楽はスタスタと帰ってしまった。

ガララと、神楽は万事屋の戸を開ける。

「ただいまヨ」……」

「おーう やけに早かったな」

と、銀時は神楽に言った。

「どうしたの 神楽ちゃん 浮かない顔して」

「うるっさい そのメガネぶち割るぞ」

神楽は自分の部屋に引きこもった。

「どうしたんでしょうね 神楽ちゃん」

「さあな……」

そして、そのまま沖田から連絡も来ずに一日がたった。

神楽は苛立ちが隠せない。

次の日 クリスマス。

朝、沖田から万事屋に電話がきた。

「あゝ沖田君？神楽ちゃん？神楽ならまだ寝てるよ え？……わか
ったわかった そう伝えとくから……おう」

【ガチャッ】

メッセージを受け取った銀時は、神楽を起こした。

「神楽 今日の夜 大きな木がある公園で沖田君が待ってるってよ」

「え！？」

神樂は飛び起きる。

「大きな木がある公園ってどこアルか？」

「大江戸公園だろ」

神樂は、嬉しさと昨日の苛立ちが五分五分だった。

とにかく神樂は、夜まで準備を始める。

そして夜。

大きな木がある公園 大江戸公園。

その公園の大きな木の下に、暗くてよく見えないが人影がうつすら見えた。

たぶんそれが沖田だろう。

神樂は、歩み寄って声をかけた。

「おいサド！」

神楽の声に、沖田が振り返る。

「お 来たか」

沖田はいつも通り、不敵な笑みで返してきた。

「来たかじゃないアル！」

神楽は最初に、怒りをあらわにした。

「何で怒ってんでイ？」

「何で昨日いなかったアルか！—昨日約束したのに！」
おとこい

神楽の言葉に、沖田は頭を掻きながら返す。

「ああ 悪イ」

「悪いで済んだら警察はイラネーんだヨ！」

「いや 俺警察だし」

「もう いいアル！お前のせいでテンション下がったネ！帰るアル
！」

神楽は、本当に帰ろうとした。

しかし、沖田は神楽を引き止める。

「待てよ 今日はお前に見せたい物があってな コレで許してくれ

ねーかい？」

「え？」

神楽が振り返る。

「ほらよ」沖田は、神楽に大きな袋を渡した。

「な 何アルか コレ？」

「俺からのクリスマスプレゼントだ」

神楽は、嬉しそうな顔で袋からプレゼントを取り出した。

プレゼントは四角いスイッチのようなものだった。

冬の寒い風が吹き通る。

「……………え？何コレ？」

「それ 押してみ」

神楽は少し躊躇した。

しかし、言われるがままに、スイッチを押した。

すると、パアアツと赤・青・黄色の光が大きな木から放たれた。

神楽はハツとそちらを振り向く。

「俺からのクリスマスプレゼントは このクリスマスツリーだ」

「わあ……キレイだ」

神楽は、ツリーから放たれる光のせいかな、目を輝かせ、そして寒さのせいだろうか、それとも嬉しいのか、頬を赤く染めていた。

「……………」

沖田はそんな神楽を見て、自然に体が動いた。

「神楽……………」

無意識のうちに沖田は、神楽を抱き寄せていた。

「あ……………」

沖田と神楽は、しばらくの間、大きなツリーの下で抱き合っていた。しばらく時間が経った後、沖田は神楽を一旦体から離れた。

「どうだい？俺からのクリスマスプレゼントは？」

「最高アル！アリガトネ！私　今までで一番嬉しかったヨ！」

「ハハ　そうか　まア　コレの準備するのも一日かって俺も疲れたし　そう言われると俺も疲れが吹っ飛ぶっーか　嬉しいもんでさア」

そこで神楽は気付いた。

「あ……　もしかして　コレの準備でサド　昨日いなかったアルか？」

「そうだよ」

沖田は優しい顔、優しい声で言った。

途端、神楽は涙をこぼす。

「はー？お前　ちよっチャイナ？何で泣いてんだよ！」

「う……うるさいアル！こっち見んじゃねーヨ！」

沖田は目をそらすように下を見る。

「……………ハア……」

ため息一つついた後、沖田は自分の足元に手を伸ばした。

そして、神楽の後頭部目掛けて高速ストレートを投げ、見事に直撃する。

バシャツと音を出し、見事に神楽の後頭部で碎けた。

「な 何するアル……ぶっ！！」

そう言って振り向いた神楽にもう一発バシャツ。

「これくらいで泣くんじゃねーよ 泣き虫が」

「あー？イラツときたアル！もう容赦なしじゃ サドガキイイ！」

神楽も負けじと雪玉を放る。

しかし、沖田は身軽によける。

「甘いぜ！雪合戦は俺の得意分野だアア！」

沖田は投げにくい体制から、神楽に向かって雪玉を投げた。

バシャツ。投げ終わってよけることが出来なかった神楽に見事に当たる。

「ぬがあああ！私だってかぶき町の雪の女王と呼ばれた女ネー！！」

神楽の剛速球が沖田に命中。

「ほう……やるじゃねーか」

本格的に雪合戦が始まる。

「あー！お前もう死刑決定な！覚悟しろチャイナ！」

「お前が仕掛けてきたんだろ！ボケエ！死ぬのはテメーじゃアアア
！！」

常人じゃ見えない速度で繰り広げられる雪合戦。

そこに、二人の男が通りかかった。

「お？ありゃあ 総悟とチャイナ娘じゃねーか 総悟のヤツ仕事サボってこんなところで遊んでたのか」

土方と原田だった。

土方は、公園に踏み入りズンズンと進んでいく。

「ちよつ 副長！ 邪魔はしない方が良いんじゃない……」

土方は原田の方を振り返る。

「いーんだよ 総悟が仕事サボって遊んでるのを注意するだけだ
ま、そこで待って……ぶっ！」

前を振り返った土方に雪球が命中。

「土方死ねエエエ！！」

「……ほう……総悟オ……死にてー様だなアア!!」

土方参戦。

そこに、買い物帰りの新八と銀時が通りかかった。

「あ! あれ神楽ちゃんじゃないですか?」

「あー来てみて正解だった……って なんで土方アイツもいるんだ?」

「さあ? とりあえず行ってみましょ……ぶっ!」

新八に雪玉が直撃。

「帰れダメガネ! お前みたいなダメガネは戦場にイラネー!」

「んだとコルアア!! なめんじゃねーぞコルアアア!!」

新八参戦。

「あーあー 全くガキだねー じゃ 俺ア帰ってジャンプでも読…
…ぶっ」

銀時に雪球が直撃。

「おっと 悪イ悪イ 手が滑っちゃった」

「……土方くゝん……死ぬ準備は出来てるかコルアアア!!」

銀時参戦。

いつのまにか、大規模雪合戦となってしまうた。

それを遠くで見て呆れた原田は、局長（近藤）に電話をかける。

「あ もしも局長？ すいません今日 副長や沖田隊長は帰れなそうです」

「あ？ 原田か？ お前こんな時に掛けてくんなよ！」

「は？ 局長？」

「俺は今からお妙さんに 俺の愛がこもった このクリスマスプレゼントを渡すんだ！ コレを渡せばお妙さんも俺にメロメ……ろぶつ！！」「消え去りなさい クソゴリラアア！！」

ガッ……ピー……。

それっきり電話が切れた。

原田は、真選組屯所に向かって歩き出す。

公園に残されたみんなは激怒しながら、それでも楽しそうに雪合戦をしていた。

神楽の胸の中には、嬉しさが広がる。

今年のクリスマスは、みんなで笑って過ごした。

最高の贈物^{クリスマス}だった。

今までクリスマスも一人だった神楽に贈った沖田の、そしてみんなのプレゼント。

いきなり沖田が口をあけた。

「チャイナアアア!!」

「何アルかアアア!!」

「お前はもう 一人じゃねーぞ!」

神楽の手が止まる。

バシッと雪球が当たる。

銀時が続ける。

「ああそつだ!これから毎年クリスマスは寂しい思いをしなくて良いんだぞ!」

土方が続ける。

「おい！ 勝手なこと言うんじゃない！」

新八が続ける。

「神楽ちゃんの過去 みんな知ってるんだからね！」

神楽は、顔に手を当てうずくまる。

「うつ……ひつく……みんなあ……」

沖田が神楽に雪玉を投げる。

「ほら もう終わりかい？ 泣き虫さんよ！」

神楽は涙をぬぐい、立ち上がった。

「ぐすつ………百倍返しにしてやるヨ！」

また始まる雪合戦。

神楽は最後までみんなと楽しんだ。

沖田と二人きりとはいかなかったけど、最高の思い出が作れたクリスマスだった。

（後書き）

最後まで読んで頂いて、ありがとうございました。
クリスマスはまだですが、書きたくて仕方なくて、投稿したくて仕方なくて……（、；A）
それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3127f/>

君に贈るクリスマス 沖/神

2010年10月9日20時22分発行